

ベルニーニの2つの伝記、 《コスタンツァ・ボナレッリの肖像》をめぐって

石鍋真澄

ローマ・バロック美術の天才、ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ（1598-1680）に関しては、17世紀の美術家としては例外的に資料が残されている。それらの資料のおかげで、彼の生涯や作品について、われわれは十分な情報を得ることができる。残念ながら、多くの手紙を書き、優れた詩を創作したミケランジェロのように、ベルニーニ自身の言葉が残されているわけではない。しかし、フィレンツェの有名な著作者バルディヌッチとベルニーニの息子ドメニコによる2つの伝記と、シャントルーによるベルニーニのパリ滞在の詳細な記録が、彼の生涯と人となりについて多くのことを教えてくれるのである。

ベルニーニ関係のこれら3つの基本的資料のうち、シャントルーの『騎士ベルニーニのフランス旅行日誌』は17世紀の美術家の詳細な記録として特筆すべき価値を有している⁽¹⁾。しかし、シャントルーの日誌は近代になって発見され、出版されたものである。それに対して、バルディヌッチとドメニコの伝記は、それぞれ独立した伝記としてベルニーニの死後あまり時を置かずに出版されている。とりわけバルディヌッチのそれは、西洋美術史上、列伝ではなく独立した書物として出版された最初の美術家伝だとされる。

近年、2つのベルニーニ伝は美術文献、つまり美術家の伝記というジャンルの文献として、また、ベルニーニの美術家像形成の問題に関係する文献として、注目され、さまざまな角度から研究されるようになった。こうした新しい研究動向をふまえ、《コスタンツァ・ボナレッリの肖像》の場合を例に、2つの伝記について若干の考察を加えようというのが、本論の意図である。

周知の通り、コスタンツァ・ボナレッリ（ボヌチェッリ）はベルニーニの愛人だった女性で、バルジェッロ国立美術館（フィレンツェ）所蔵の胸像（図1・2）は、バロック肖像彫刻の傑作として、また肖像史上注目すべき作品として知られている⁽²⁾。1638年、39歳のベルニーニはコスタンツァと文字通りのスキャンダルを起こした。総じてベルニーニは模範的な生涯を送ったといえるが、ある意味で、これは唯一の人間的出来事である。コスタンツァという女性については、ベルニーニの仕事を手伝っていた彫刻家の妻という以外、何も知られていなかった。だが数年前に、サラ・マックフィーが徹底的な資料調査に基づく見事な研究

書を出版した⁽³⁾。彼女の研究は、ベルニーニとその時代の研究に新しい視野を開いたと言っても過言ではない。《コスタンツァ・ボナレッリの肖像》を取り上げようと考えたのは、そのためでもある。

ベルニーニの2つの伝記

1680年11月28日、82歳の誕生日を目前にして、ベルニーニは世を去った。最晩年のベルニーニは、サン・ピエトロ大聖堂のクーポラのヒビが問題になるなど（クーポラ崩壊の危険が取りざたされた）、心労の多い日々を過ごした。彼が亡くなったときには、それなりに盛大な葬儀が行われ、多額の遺産が話題になった。しかし、前世紀のミケランジェロのように、彼を記念する行事は行われなかったし、記念物（墓碑）が作られることもなかった。それどころか、遺言に従って、いかなる墓も作られなかったのである。

そのかわり、フィレンツェの有名な著述家フィリッポ・バルディヌッチ（1624-97）によって伝記が書かれた。スエーデンのクリスティーナ女王の依頼を受けて執筆された伝記は、ベルニーニの死から2年後の1682年に、フィレンツェの版元ヴィンチェンツォ・ヴァンジェリステイから出版されている⁽⁴⁾。

バルディヌッチはフィレンツェでレオポルド・デ・メディチ枢機卿の名高い素描コレクションのカタログを作り、ヴァザーリに続く美術家列伝を書いた、当代随一の美術通である。ベルニーニ伝の著者としては最良の選択だったといえるだろう。実際、彼の伝記はベルニーニに関する最も重要な資料として、今日に至るまでその研究の基本となってきた。先にも触れたように、西洋美術史上、列伝の形ではなく独立して出版された最初的美術家伝である。

バルディヌッチの伝記は、中型の判型の112ページほどの著書である。伝記には、口絵としてバチッチャ（ジョヴァンニ・バッティスタ・ガウッリ）の原画によるベルニーニの肖像版画が付され、巻末にサン・ピエトロ大聖堂の建築図面などの版画が10点ほど付けられている（図3・5）。

そのうち、最後のかかなりのページが、晩年のベルニーニに向けられた、サン・ピエトロ大聖堂のクーポラに発見されたヒビの原因が、ベルニーニが監督した支柱の4つの祭壇設置工事にある、とする非難に対する反論に当てられている。伝記の最後にサン・ピエトロ大聖堂関連の版画が多く添えられているのはそのためである。

もう一つの伝記は、末の息子ドメニコによって書かれ、1713年にローマの版元ロッコ・ベルナボから出版されたもので、ロドヴィーコ・ピコ・デッラ・ミランドラ枢機卿に捧げられている⁽⁵⁾。ベルニーニには少なくとも11人の子供がいたが、ドメニコは彼が59歳の時にもうけた末っ子である。ドメニコは短期間イエズス会の修練士になったが、結局は司祭にはならず、後に結婚して子供をもうけることになる。教会史を研究して4巻の異端の歴史などを出版したなかなか優秀な人物である。

ドメニコの伝記は、小型の判型で本文180ページほどの著作である。バルディヌッチのそれに付されたのと同じバチッチャの原画によるベルニーニの版画による肖像画が付けられて

いるが、その他の版画図版はない(図4・6)。

バルディヌッチの伝記は、彼の有名な美術家列伝とともに著作集に入れられたために広く知られ、リーグルのドイツ語訳(1912年)、ザメク・ルドヴィチのイタリア語校訂版(1948年)、そしてエンガスの英訳(1966年)が出版されるなど、常に最も重要なベルニーニ資料と見なされてきた⁽⁶⁾。一方、ドメニコのそれは1713年に初版が出て以来、ごく最近(1999年)まで近代の校訂版はおろかファクシミリ版もなかったので、図書館で古い版本を参照するよりほかに、一部の専門家に知られるだけであった。しかし、ファクシミリ版も出、さらに2011年にモルマンドの詳細な注のついた英訳が出版されて、ようやくそれにふさわしい扱いを受けるようになった⁽⁷⁾。また、2つの伝記に関するさまざまな著者による研究書(2006年)も出版され、新たな議論を呼んでいる⁽⁸⁾。

実は、この2つの伝記の他に、ごく短いベルニーニの伝記がパリ国立図書館に残っている。タイトルのないこの手稿は、筆跡や文体から、ベルニーニの長男でやはり教会史の著作を残したピエトロ・フィリッポの手になると考えられている。1640年、ベルニーニ42歳の時の子であるピエトロ・フィリッポは、聖職の道に進み、後にサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂の参事会員になった人物だ。この短い伝記については、19世紀からその存在が知られていたが、ほとんど注目されることがなかった。ようやく近年、モルマンドによって英訳され紹介された⁽⁹⁾。この伝記の最後に、ベルニーニは82歳で健康であり、81歳まで大理石彫刻にはげみ、信仰の証しとして救い主の像を制作した、と記されている。したがって、ベルニーニの死の直前に(あるいは直前まで)書かれたと考えられる。

この短い伝記の存在や、2つの伝記の比較、そして諸状況の考察から、ベルニーニ存命中から家族を中心に、ベルニーニの伝記を残そうとする発想と準備があったと、モルマンドらは推測している⁽¹⁰⁾。実際、バルディヌッチは家族からベルニーニに関する資料、たとえばルイ14世の書簡とかウルバヌス8世の親書などを提供されている。おそらくこの短い伝記も提供されたに違いない。ドメニコはバルディヌッチの伝記が出版されたとき25歳だったが、30年後の伝記出版までには、それなりの長い道のりがあったのである。

《コスタンツァ・ボナレッリの肖像》に関する2つの伝記の記述

コスタンツァ・ボナレッリと彼女の胸像については、ピエトロ・フィリッポによると思われる短い伝記では、何も触れられていない。バルディヌッチの伝記では、コスタンツァの胸像が伝記の最後に付されたベルニーニの作品一覧に記載されているだけである。胸像(Ritratti testie con busto)のリストに、「コスタンツァ・ピッコローミニ (トスカーナ) 大公のギャラリー」と記されている。ここで、一般に知られている「コスタンツァ・ボナレッリ」ではなく、「コスタンツァ・ピッコローミニ」と記されている点は注目に値する。この点については、後で触れることにしたい。

バルディヌッチの伝記では、本文にもコスタンツァの胸像に言及されている箇所がある。ベルニーニが教皇ウルバヌス8世の強いすすめで結婚を決意し、法律家パオロ・テツィオの

娘と結ばれ、33年の結婚生活で多くの子宝に恵まれた、という記事の少し後で、サン・ピエトロ大聖堂のコンテッサ・マティルダの墓碑に触れたところだ。ベルニーニはこの墓碑の各部分を弟子のスペランツァやボルジ、兄のルイーギに任せたが、「紋章の上の2人のプットはマッテオ・ブオナレッリによって彫られた。彼はもう一人の弟子で、かのコスタンツァの夫である。(ベルニーニは) 若干の胸部を伴った彼女の肖像頭部を制作したが、それは(トスカーナ) 大公殿下のギャラリーにある」と記しているのである⁽¹¹⁾。

これに対して、ドメニコの伝記にはより詳しい説明がある。ベルニーニの絵画作品に触れた部分で、自宅とトスカーナ大公のギャラリーにある「有名な2つの自画像」に触れた後、次のように述べている。

コスタンツァという女性のたいへん賞賛されているそれ(肖像画)がベルニーニ家に置かれており、また胸像、その女性の大理石の頭部が大公のギャラリーにある。一方も、また他方もかくもよい趣味と、生き生きした手法で制作され、その作品で騎士(ベルニーニ)はモデルをいかに愛していたかを明らかにしている。この人は当時彼が恋人としていた女性だった。そのために、彼は少々罪を犯すことになったが、それはまた彼に、偉大な人間であり美術に卓越している、と宣言されるという名誉をもたらした。彼女に嫉妬したためか、その他の理由によるのか、恋は盲目というとおり、彼は召使いにいかなるものか知らないが辱めを与えるよう命じた。それは実行に移され、万事が明るみに出、傷害があったので、軽くはない刑罰で罰せられねばならなかった。教皇は事実を確かめて命令を下し、召使いは追放の刑に処し、騎士には侍従官を通して羊皮紙に記した罪の赦免状を送った。そこには、後世に人びとに伝えるに値する彼の能力(ヴィルトゥ)への賞賛が記されている。彼は美術に卓越している、という以外の理由で、赦されたのではない。そこで彼は他の称号ではなく、「彼の世紀に光をもたらすローマの栄光のために、神の意向で生まれた、稀なる人間、至高の天才」と呼ばれているのである⁽¹²⁾。

コスタンツァの肖像画が家にある、とドメニコが述べている点は注目されるが、それとおぼしき作品は知られていない。ここに見るように、バルディヌッチがコスタンツァとのスキャンダルにはまったく触れていないのに対して、ドメニコは事件に言及し、それがモラルに反したことであったと認めている。しかし、それによって教皇に名誉ある言葉をいただくことになったと、肯定的にとらえようとしているのである。しかし、バルディヌッチがベルニーニの弟子(助手)の一人マッテオ・ブオナレッリの妻と伝えるコスタンツァについて、ドメニコは「コスタンツァという女性」(une Costanza)としか述べていない。

コスタンツァ事件の真相

ベルニーニとコスタンツァのスキャンダルに関しては、いくつかの資料によってある程度その真相を知ることができる。

まず、1639年5月28日付けのモデナ公大使の通信はこう述べている。

騎士ベルニーニは彼の兄弟が、彼が愛していた女性と交わっているのを見て、かくも意気消沈してしまい、ローマで最も美しい女性を妻として迎えることができるまで、心の安らぎを見出すことはできなかった⁽¹³⁾。

ベルニーニが教皇の忠告を受け入れて結婚したのは、1639年5月15日だったから、この通信はその直後に書かれたことになる。

事件の詳細については、チェザレ・ドノフリオが1967年に紹介したフィレンツェ国立図書館の資料によって、その概要を知ることができる。作者不詳のメモは次のように述べている。

ベルニーニは名前をコスタンツァという、……（ママ）の馬丁の娘で、ルッカ出身の彫刻家マッテアッチョの妻であった女性に恋していた。彼の弟（ルイージ）がそこ（彼女のところ）に行っていると噂されていたので、（ベルニーニは）それをはっきりさせたいと望んだ。そこである晩、翌朝田舎に行くつもりだと言って、朝になるとそのために馬車を用意させた、しかしローマから出ず、そのかわりサン・ピエトロの裏にあり、シニョーラ・コスタンツァが住む家の向かいにあった、彼が仕事をしていた部屋に行った。そこに着くと、御者に帰れという命令を受けるまで決められた場所に留まるように命じた。そこは（コスタンツァの家から）誰かが出てくるのを見張るにはうってつけの場所だった。ほどなくして、ベッドから出たばかりのように服を着かけた女性に戸口まで伴われて、弟が家から出できた。これを見ると、ベルニーニは弟の後を追ひ、サン・ピエトロで彼を見つけると、肋骨を2本折るほどひどく鉄の棒で打ちすえた。引き離されなかったならば、おそらく、彼を殺してしまっただろう。

しかし、これで終わりではなかった。彼はすぐに家に戻って召使いを呼び、グレコ酒のフィヤスコ2本とカミソリを渡して、「私からと言ってシニョーラ・コスタンツァのところに行って、これを渡して、機を見て、彼女（の顔）に切りつけろ」と言った。（召使いは）これを実行したが、弟を戸口まで見送った後ベッドに戻っていた彼女を見つけたから、たいした手間はかからなかった。これによって、（ベルニーニは）3000スクードの罰金刑を受けたが、それについては教皇によって赦免された。

彼が大理石で制作したこの女性の肖像は、彼自身によってジョヴァンニ・カルロ・デ・メディチ枢機卿殿に贈られ、今日（トスカーナ大公の）ギャラリーにある。目は作者によって黒に彩色され、髪は彫られているが、そこにはマエストロの手法はまったく認められない⁽¹⁴⁾。

これらの資料が伝える事件の真相は衝撃的だ。この事件が起こったのは、いろいろな状況から1638年の8月末から9月初めだと推測できる。当時39歳だったベルニーニは助手の一人の妻、コスタンツァ（23歳くらい）を恋人にしていたが、彼女と弟ルイージ（26歳くらい）

が関係しているとの噂を耳にして、策を練って現場をとらえ、激怒した彼は弟に重傷を負わせた。それだけでなく、召使いに命じて、おそらくコスタンツァの顔をカミソリで傷つけさせた、というのだ。こうした行為は通常娼婦などを恋人としていた男が、彼女が不実を行ったときにする仕返し（ディスペット）であり、当時スフレージョ（傷、恥辱の意）と呼ばれた⁽¹⁵⁾。この蛮行で召使いは追放され、ベルニーニは多額の罰金を科せられた。だが、教皇はそれを赦免したというのだ。一方、弟のルイージはボローニャに逃れたが、1年あまり経って、兄の承認を得て仕事に復帰している。

さらに、もう一つの興味深い資料が事件の真相とベルニーニの実像を垣間見させてくれる。ペッキアイアが1946年に、アリオストの有名が叙事詩「オルランド・フリオーゾ」になぞらえて「ベルニーニ・フリオーゾ」（狂えるベルニーニ）と題した論文で紹介した、ベルニーニの母アンジェリカが枢機卿フランチェスコ・バルベリーニに当てた手紙である。アンジェリカは、ウルバヌス8世のカルディナル・ニポーテ（甥の枢機卿）として絶大な権力を持ち、サン・ピエトロ大聖堂造営局長、つまりベルニーニの雇用主でもあった、フランチェスコ・バルベリーニに、息子を何とかして欲しいと嘆願しているのだ。そこに述べられた「狂えるベルニーニ」の行状はこのようなものだ。

わが息子、騎士（ベルニーニ）は法にも貴方様の権威にも何ら敬意を払わず、昨日、弟のルイージを殺すために、手に武器を持ち、他の者たちを引き連れて、ドアを押し開けて家に入り、母が誇りをすてて足下に流す涙にもかまうことなく、そこら中を探し回った後、何ら敬意もなく剣を手にサンタ・マリア・マッジョーレ（聖堂）に入り、神とその主たちを侮り、司祭館を探し回りました。自分が世界の主だといわんばかりです。これが大きな過ちであること、また拔身の剣を手に弟を追いかける彼を目にした人びとをどれほど呆れさせ驚かせたか、貴方様に大げさに申し上げるまでもないと思います。サンタ・ビビアーナの通りで弟に出くわすと、サンタ・マリア・マッジョーレまで追いかけました。そこには教会の神聖な権利を守ろうとする多くの司祭がおり、彼が傲慢にドアを蹴るのを見たのですが、今日、法をも畏れないほどになっている彼の大きな力を恐れて、あえて何をするすることもできませんでした。（母が）非常に悲しみ、そしてローマ中が驚いたことに、すべてがお咎めなしに済まされたのです⁽¹⁶⁾。

ベルニーニの母アンジェリカは文盲であったと推測され（遺書に十字のサインをしている）、この手紙は書記か弁護士が代筆したものと思われる。実際、大げさな言い方が目に付き、内容にも誇張が感じられる。しかし、「パドロン・デル・モンド（世界の主）」といわんばかりだと、母親にいわしめたベルニーニの狂乱ぶりと、絶頂期の彼の権勢は印象的である。まるでオペラの一場面のような。しかし、この手紙でアンジェリカは、息子の乱行のもととなった事件には言及していない。

コスタンツァという女性

ある意味では、コスタンツァについて、われわれは17世紀ローマのどの女性よりも明確なイメージを描くことができる。ベルニーニが魂を込めて作り上げた胸像が、その容姿を忠実に伝えているからだ。おそらく小柄で、肉付きのよい、才気を秘めた丸顔の女性である。ヒッバートが「石化した情熱の断片」と称したように、そこには今もベルニーニの欲望を秘めた官能性が漂っている。

しかし、容貌のほかには、馬丁の娘でベルニーニの仕事を手伝ったルッカ出身の彫刻家の妻ということしか分からず、事件後に彼女がどうなったのかも不明だった。こうした状況は、サラ・マックフィーの2006年の論文と2012年の著書によって、劇的に変化した。

マックフィーは論文の中で、興味深い資料を紹介している。ニコデムス・テッシン・ザ・ヤンガー（1654-1728）は17世紀スウェーデンを代表する建築家だが、やはり著名な建築家であった父の指南でローマを訪れ、晩年のベルニーニの工房で学んだ。1677年に彼が残したメモ中に、トスカーナ大公のコレクションで見たコスタンツァの胸像に関する部分があるのだ。

騎士ベルニーニが制作したもう一つの胸像は、彼が愛したたいへん美しい女性の肖像で、彼女はある画家の妻だった。だが、彼は彼女と仲違いした後、顔を傷つけさせた。彼女はたいへんに富裕で、亡くなると壮麗な棺台が設けられた⁽¹⁷⁾。

コスタンツァを画家の妻としているのは誤りだが、最晩年のベルニーニのもとで修行したテッシンはスキャンダルのことを知っており、しかも彼女が富裕で立派な葬儀をしたと伝え聞いていたのである。ここで思い出されるのは、バルディヌッチの伝記に付されたベルニーニの作品一覧に「コスタンツァ・ピッコローミニの胸像」と記されていたことだ。ピッコローミニ家といえば、有名なルネサンスの人文主義教皇ピウス2世、そしてピウス3世を出したシエナの名門中の名門である。好奇心を刺激される事実だ。

マックフィーはローマの古文書館の調査でコスタンツァ関係の多くの資料を発見し、誰もが歴史の闇に沈んでしまったと思っていた彼女の足跡を蘇らせた。数多くの資料によって明らかにされたコスタンツァの生涯の詳細について、ここで述べることはできないが、ごくごく簡単な輪郭は次の通りだ。

コスタンツァは1614年頃、スペイン人高位聖職者の従僕（馬丁）だったヴィテルボ出身のレオナルド・ピッコローミニの娘として生まれ、1625年に初めてローマの記録に登場する。ピッコローミニ家は名家中の名家だが、レオナルドは貧しい分家に属していた。それでも、1662年のコスタンツァの遺書にはピッコローミニ家の紋章を刻んだシールが用いられている。レオナルドの一家はローマではサン・ロレンツォ・イン・ルチーナ聖堂の裏に住んでいた。

当時、ボルゲーゼ家の一員が創設した基金によりサン・ロッコ同信会から毎年10人ほどの娘に持参金の援助があったが、1628年、14歳のコスタンツァはその一人に選ばれている。彼女がルッカ出身の彫刻家マッテオ・ボナレッリ（ボヌチェッリ）と結婚したのは、5年後

の1632年2月である。

マッテオは1629年、25歳の時にローマに出て、サンティ・ヴィンチェンツィ・エ・アナスタジオ地区で暮らした。この地区には彫刻家が多く住み、また娼婦のメッカでもあった。彼がベルニーニのもとで仕事するようになったのは、1636年からで、その関係はコスタンツァ事件後も変わらず、彼が亡くなる1654年まで続くことになる。

われわれが最も知りたいと思うのは、1638年の夏の終わりに起こったと考えられるベルニーニとのスキャンダルの後、コスタンツァはどうしたのかという点であろう。当時の法に従って扱われたとしたら、彼女はむち打たれ、髪を剃られてカーサ・ピア（厚生施設）に送られ、最長2年間、夫の許しを待つことになったはずだ。そのあたりの経緯は分からないが、コスタンツァがゴヴェルナトーレ（司法官）に宛てて書いた自筆の嘆願状が発見されている。1939年の初めに書かれたその手紙によれば、彼女は4ヶ月カーサ・ピアに収容されており、苦しい生活を強いられていた。カーサ・ピアに収容されたのは夫の意志ではなく、ゴヴェルナトーレの命によるものだったようで、1639年4月7日に夫の元に戻されたとメモ書きされている。彼女がトレヴィの泉の近くにあった夫の家に帰ったことは、その月の地区の記録からも確認できる。すでに述べたように、ベルニーニが結婚したのも同じ頃、5月15日のことであった⁽¹⁸⁾。

結論から言うと、コスタンツァはこの後恵まれた、おそらく幸福な生涯を送ったと考えられる。事件から15年ほどして遺書を書いた夫マッテオは、彼女を「私の最愛の妻」（ミア・デレッティッシマ・モーリエ）と呼んで、すべての財産を譲っている。マッテオはベルニーニの手伝いをするほか、パンフィーリ家のために作品制作や購入、古代彫刻の修復などの仕事をした。ベルニーニが彼に重要な仕事を回した形跡もある。そのほかに、彼は美術作品の仲介の仕事もした。有名なフランスの著作者フェリビアンが彼の家を訪ねたことも知られている。また、トレヴィの泉の近くに立派な家を購入し、コスタンツァの甥（姉の息子）を引き取って2人の女中とともに暮らしていたことが分かっている⁽¹⁹⁾。

先に触れた自筆の嘆願状が示すとおり、コスタンツァは当時としては例外的に教育を受けて教養を身につけた女性だった。特筆すべきことは、彼女が夫の死後、「コスタンツァ・スクルトーラ」（彫刻家コスタンツァ）としてビジネス活動をした点だ。当時女性が仕事することは、夫の権利を引き継いだ寡婦のみに可能であった。40歳で寡婦となったコスタンツァは、夫の仕事を受け継いで、今日流にいう画商のビジネスを続けたのだ。プサンやチェルコツィ、スウィーツらの多くの作品を家に飾っていたことは、財産目録からも確認できる。

1662年に48歳でコスタンツァが亡くなったとき、立派な葬儀が行われたことは資料的にも裏付けられる。彼女はサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂に葬られた。スエーデンの建築家テッシンの証言は正しかったのである。

ベルニーニが愛した女性はこのような人であった。長い間漠然と思い描かれてきた、彫刻家の多感な妻といったイメージとはだいぶ異なっている。18世紀には彼女を「ベルニーニのフォルナリーナ」と呼んでいる資料もあるが、確かに、そうした面があるかもしれない。「フォルナリーナ」というまでもなくラファエッロの恋人である⁽²⁰⁾。

2つの伝記とコスタンツァ

コスタンツァの足跡は、ベルニーニ時代のローマのさまざまな側面を教えてくれる。われわれの常識では理解しえない、社会の制度や慣習、そしてモラルやメンタリティを含む時代状況が浮き彫りにされている。たとえば、ベルニーニとマッテオの関係について、マッテオはベルニーニに自分の妻を提供したのであろうか、という疑問がわいている。また、スキャンダルから30年以上経った後でもベルニーニは、彼の作品（コンスタンティヌス帝の騎馬像）を誹謗中傷する文書で、この事件を当てこする表現を浴びせられている⁽²¹⁾。ベルニーニの若気の過ちは、忘れられることはなかったのだ。

コスタンツァをめぐる出来事はベルニーニの2つの伝記を理解する上でも重要な示唆を与えてくれる。バルディヌッチは事実をかなり正確に知っていた。先に引いたフィレンツェ古文書館の作者不詳のメモは、バルディヌッチ関係の資料にあるものだ。だから、コスタンツァ・ピッコローミニという彼女の正確な姓を伝えているのもうなずける。しかし、彼は事件には触れていない。また、ベルニーニが結婚に至る経緯を、教皇に強く勧められたためとしているが、コスタンツァ事件との関係には言及していない。

一方、ドメニコは自分が生まれるはるか以前に起こった父のスキャンダルに言及しているが、核心には触れていない。そして、教皇が最大級の賛辞で罪を赦した勅書が届けられた点が強調されている。また、両親の結婚に関してはまったく別の章で述べられている。父ベルニーニを敬虔で偉大な人間をして描こうとしたドメニコが、スフレージョという行為に言及しているのは、意外に思われるが、そこには、今日とは違った社会的なモラルや価値の存在が感じられる。

ベルニーニ・コスタンツァ事件は、17世紀ローマの社会や人びとの実像を知る手がかりとなり、またベルニーニの2つの伝記の性格を再確認させてくれるという意味で、特別な意義を有している。しかし、《コスタンツァ・ボナレッリの肖像》の高い芸術性はそれらすべてを超越しているといえるだろう。

註

- (1) Chantelou, Paul Frèart de, *Journal de voyage du Cavalier Bernin en France*, ed. Lalanne, Paris, 1885. 今日ではフランス語版も複数あり、英語訳（1985年）、ドイツ語訳（2006年）、イタリア語訳（2007年）などが出版されている。
- (2) この時期には女性の胸像は稀であり、また個人的な目的で制作されたという点でも特筆すべきである。これらについては、註(3)にあげたマックフィーの著書第1章（3頁以下）で適切に論じられている。なお、コスタンツァの夫であったルッカ出身の彫刻家は一般にマッテオ・ボナレッリとして知られているが、ボナチェッリがより正確だとマックフィーは述べている（前掲書63頁）。
- (3) McPhee, Sarah, *Bernini's Beloved, A Portrait of Costanza Piccolomini*, 2012, Yale UP.
- (4) Baldinucci, *Vita del Cavaliere Gio. Lorenzo Bernino*, Firenze, 1682.
- (5) Bernini, Domenico, *Vita del Cavaliere Bernino*, Roma, 1713.

- (6) バルディヌッチの伝記の各国語版は次の通りである。 *Vita di Gian Lorenzo Bernini*, studio e note di Sergio Samek Ludovici, Milano, 1948.; Alois Riegl, *Filippo Baldinuccis Vita des Gio. Lorenzo Benini*, Wien, 1912.; *The Life of Bernini*, Translated by Catherine Engass, Pennsylvania State UP, 1966.
- (7) Bernini, Domenico, *The Life of Gian Lrenzo Bernini*, A Translation and Critical Edition by Franco Mormando, Pennsylvania Stale UP, 2011.
- (8) *Bernini's Biographies, Critical Essays*, ed. by M. Delbeke, E. Levy, and S. F. Ostrow, Pennsylvania State UP, 2006.
- (9) 註(7) にあげたモルマンドによるドメニコの伝記の英訳に付録として付されている(237-241頁)。
- (10) 註(8) の論文集の序章を参照されたい。
- (11) サメク・ルドヴィチ版86頁。英訳20-21頁。
- (12) 27頁。英訳113頁。
- (13) Cesare D'Onofrio, *Roma vista da Roma*, Roma, 1967, p. 130.
- (14) D'Onofrio, *op. cit.*, p. 131.
- (15) スフレーションに関しては、註(3) であげたマックフィーの著書の44-48頁に興味深い説明がある。一つは娼婦に対するスフレーションを表した挿絵であり(図7)、もう一つは顔の傷の治療法を示した19世紀の医学書の挿絵である(図8)。いずれもマックフィーの著書に掲載された図版を転載させていただいた。
- (16) Pecchiai, Pio, "Il Bernini frioso", *Strenna dei Romanisti*, 1949, pp. 181-6. この資料はドノフリオやマックフィーの著書などに採録されている。
- (17) *Bernini's Biographies*, p. 325.
- (18) McPhee, *op. cit.*, pp. 58-62. 154.
- (19) Mc.Phee, *op. cit.*, pp. 82, 154-5.
- (20) McPhee, *op. cit.*, p. 146.
- (21) Previtali, Giovanni, "Il Costantino messo alla berlina o bernina su la porta di S. Pietro", *Paragone*, 1962, pp. 55-8.

* 本論文は2012・3年度成城大学特別研究助成「ベルニーニの伝記資料の研究」の研究果の一部である。

図版の出典は次の通り。McPhee, *op. cit. fig.* 40, 42, 119, 120.



図1 ベルニーニ コスタンツァ・ボナレッリの肖像



図2 ベルニーニ コスタンツァ・ボナレッリの肖像



図3 バルディヌッチ ベルニーニ伝

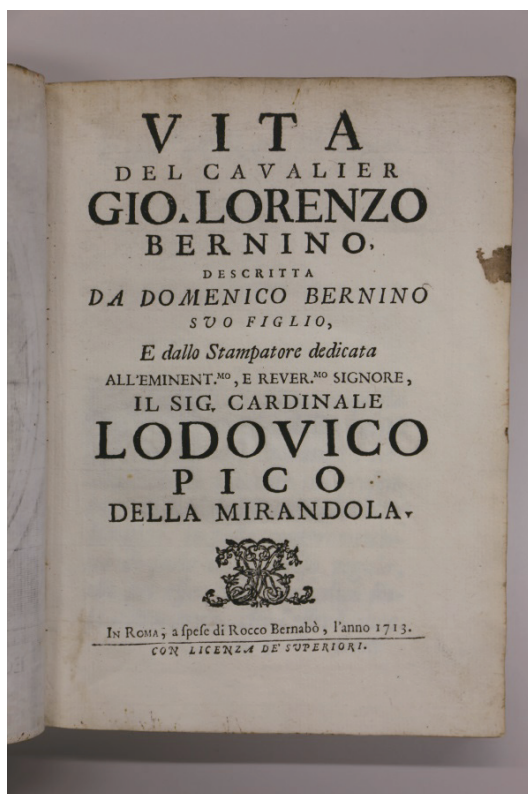


図4 ドメニコ・ベルニーニ ベルニーニ伝



図5 バルディヌッチ ベルニーニ伝

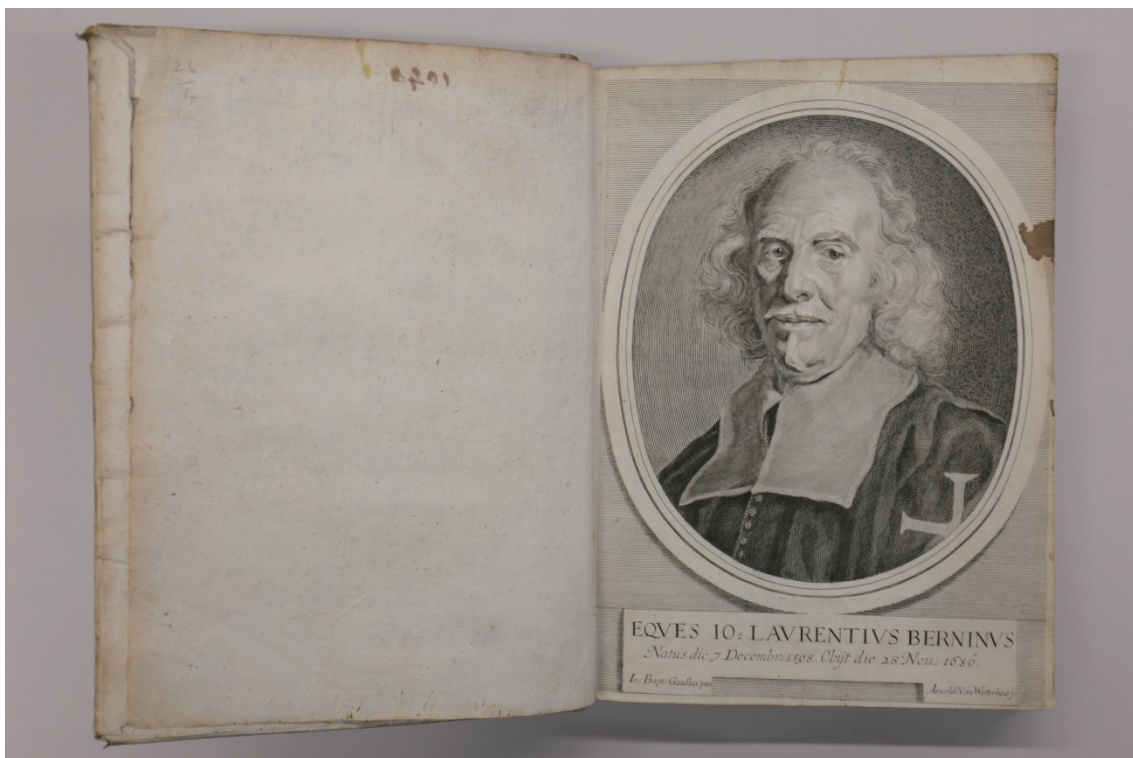


図6 ドメニコ・ベルニーニ ベルニーニ伝



図7 ジュゼッペ・マリア・ミテッリ『不幸な娼婦の生涯』(1692)より

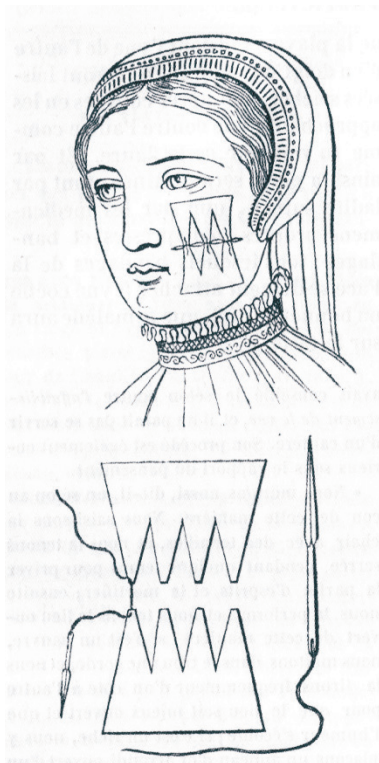


図8 アンブロワーズ・パレ『著作集』(1840-41)より

Portrait of Costanza Bonarelli and the Two Biographies of Bernini

Ishinabe Masumi

It is well known that the biography of Bernini written by Filippo Baldinucci and another by his son, Domenico Bernini, are the most important sources for studies on Bernini. In recent years, the interests in these two biographies have grown tremendously and scholars have carefully studied them from various angles. Domenico's biography of Bernini translated to English by Franco Mormando, and the collection of critical essays on Bernini's biographies edited by Maarten Delbeke and others, are the most significant results of these studies.

In this essay, the author discusses characteristics of the two biographies, centered around *Portrait of Costanza Bonarelli*. First, the author translates the notable documents concerning the scandal of Bernini and Costanza Bonarelli into Japanese, and sums the historical facts. Then the author introduces Costanza's early life and her whereabouts after the scandal, based on the study published by Sarah McPhee on Costanza Bonarelli,

Taking into consideration of all the historical facts and descriptions of the scandal by Baldinucci and Domenico, the author discusses intentions and characteristics of two biographies and their authors. Baldinucci was well informed about the scandal but did not mention it, whereas, Domenico wrote in details tying to his father's honor in the form of Pope's pardon. The difference in these descriptions reveals characteristics of each of the biographies.